

1. Japan Presents : Unique Evolution and Global Influence of Japanese Radiology

相田 典子 神奈川県立こども医療センター放射線科/横浜市立大学放射線診断科
日本医学放射線学会特任理事

RSNA 2024では、12月3日(火)に Japan Presentsが行われた。2008年以來16年ぶりに、日本の放射線医学を世界に発信するセッションが設けられたのである。日本医学放射線学会(JRS)理事長・富山憲幸先生のご指名を受け、筆者は理事長とともにモデレータの大役を担わせていただいたので、簡単に準備と当日の様子をリポートする。

今回は、日本の放射線医療の現状とJRSの取り組みを発信するプログラムとした。日本の医療制度には良いところもある。放射線科医の数が少ないことは最大の弱点ではあるが、他科の医師でも画像診断に入り込んでくる状況の中、頑張っていることを伝えたいと願ってタイトルを付け、日本の状況全般を山田 恵先生、日本医用画像データベース(J-MID)関連を明石敏昭先生、画像診断管理認証機構(AOMRI)関連を阿部 修先生に、真鍋徳子先生にはJRSのダイバーシティの取り組みの話をお願いした。1人の講演+質疑15分としていたところ、直前になってRSNA 2024のLanglotz会長が最後に4、5分のスピーチをして、富山先生に感謝の盾を贈り写真撮影をすると連絡が入り、急

遽演者の先生方に時間短縮をお願いし、それでも延びてしまった場合は最後の質疑を後回しにして、忙しいLanglotz会長のスケジュールを守ると決めるなど、バタバタと直前にメールでやり取りをして本番に突入した。なお、Japan Presentsは、当日までにRSNAからの発信はもちろん、AuntMinnieにも詳しく取り上げられていた^{1),2)}。

内心、こういうセッションはガラガラかもしれないと思っていた。ところが、である……300人入る会場であったが、開始前からどんどん人が増えてきて、座長席から見ると後から入ってきた人は席を探している。数年前にCountry Presentsを行った国の知人は、聴いているのは同邦人ばかりで身内に自国をプレゼンしたと自嘲していたが、日本人(仲間も業者さんも来てくれた)も多いもの、かなりの数の国際的な聴衆が入っており、しかも熱心に聴いてくれているのである。驚いたうれしかったというのが本番中の正直な感想で、隣の富山先生もニコニコしているのがわかった。4人の演者の先生方は、よどみなく簡潔に内容の濃いプレゼンをされ、聴衆は熱心に聴き入っていたし、Langlotz会長の

closing remarkは、各演者の講演も振り返りながら感謝の意が伝わるものであった。

さらに圧巻は、セッション終了後であった。筆者が感謝とともに終了をアナウンスすると、おびたしい人数の聴衆が演台付近に押し寄せてきて、演者も座長も囲まれ会話の渦に飲み込まれた。Langlotz会長とわれわれや演者、座長そろっての記念撮影も無理矢理集めてなんとかやっとできた感じであった。日本人も労いに来てくれたが、遠慮したのか話しかけてくるのはほとんど外国の方で、さらに後ろでは会話の順番待ちをしている人もいる。写真撮影を終えても聴衆との会話は続き、筆者は主にダイバーシティ関連で質問や励ましをいただいた。

終わって初めての感想であるが、予想以上に盛況で充実感があり、達成感があった。モデレータに指名された時には「私でいいの?」とも思い、専門分野の仕事と異なりどんな成り行きになるのかわからず不安であったが、参画できて名誉なことであったと今はしみじみ思っている。セッション前にはプレッシャーは感じていないつもりであったが、翌日にはどっと疲れが出て、わが国の放射線科を代表しての仕事という緊張は相当あったのだと後から気がついた次第である。

最後に、応援し労ってくださった皆様にも心からの感謝を表したい。ありがとうございました! これからも協力して日本の放射線科を盛り上げていきましょう。

●参考文献

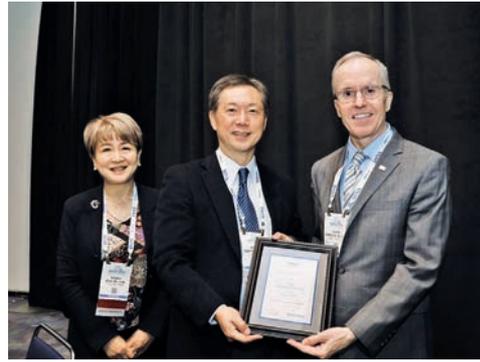
- 1) Allyn, J. : Japan and Peru Offer Perspectives During Country Presents. RSNA 2024. <https://www.rsna.org/news/2024/november/2024-country-presents>
- 2) Ward, P. : MRI safety : How Japan deals with it. AuntMinnie, 2024. <https://www.auntminnieeurope.com/clinical-news/mri/article/15709411/mri-safety-how-japan-deals-with-it>



Japan Presents会場風景



演者とモデレータ



Langlotz会長とモデレータ

エキスパートによる RSNA 2024 ベストリポート

2. 領域別技術と臨床の最新動向 頭頸部

檜山 貴志 国立がん研究センター東病院放射線診断科

本稿ではRSNA 2024の頭頸部画像診断領域の概要をお伝えする。頭頸部領域での新しい話題は多くはなかったが、photon counting CT (PCCT)の演題・セッションが散見され、トピックとなっている。

○学術研究

口演による学術発表として、頭頸部腫瘍 (S1-SSHN01)、側頭骨・PCCT (T3-SSHN02)、先進的画像技術 (R3-SSHN03) のセッションが組まれた。頭

頸部腫瘍のセッション (S1-SSHN01) では、synthetic MRIによる頸部リンパ節転移の原発巣推定、スペクトラルCTによる甲状腺がん BRAF V600E 変異の予測、papillary thyroid carcinoma (PTC) に対する修正 Node-RADS (Node Reporting and Data System) の診断能などが発表された。基調講演では、PCCTの頭頸部腫瘍への応用として、血管描出の改善、金属アーチファクトの低減、腫瘍描出の改善がなされた症例が提示されていた。

側頭骨・PCCTのセッション (T3-SSHN02) では、PCCTに関する発表が多く、コルメラの描出能が改善されたという報告や、深層学習によりノイズ低減を行った報告がなされていた。先進的画像撮影の基調講演 (R3-SSHN03-1) でもPCCTに言及があり、Gartner Hype Cycleと呼ばれる、新しい技術が社会に浸透していく過程を視覚化したモデルが紹介されていた。このモデルでは、新技術の登場と初期の関心を集める「黎明期」、過度な期待が高まる「過度な期待のピーク期」、期待が裏切られ関心が急落する「幻滅期」、実用的な応用例が増え理解が深まる「啓発期」、そして最後に技術が主流となり安定する「生産性の安定期」という一連のプロセスからなっ

ており、現在はおそらくピーク期に向かっていているものと思われる。

Scientific Posterでは今回より賞が付され、鹿児島大学・長野広明先生らの非造影 dual energy CTの電子密度画像を用いて扁桃周囲膿瘍を診断する研究がCum Laudeに選出された (T5A-SPHN-5, 61 ページ参照)。

○教育展示

頭頸部に関する教育展示では69演題が発表され、その中からMagna Cum Laudeが1演題、Cum Laude2演題、Certificate of Merit9演題が選出された。Magna Cum Laudeには、国立がん研究センター東病院の久野博文先生による“Imaging-detected Extranodal Extension in Head and Neck Cancer: Clinical Implications and Diagnostic Criteria in the Era of High-Resolution Imaging including Photon-Counting Detector CT” (HNEE-49, 50 ページ参照) が選出された。この演題では、頭頸部がんにおけるリンパ節転移の節外進展の画像分類について、歴史的背景から最新の画像分類までを包括的に解説している。画像による節外進展の分類は研究の指標となり、TNM分類にも反映される可能性がある。



ミレニアム駅からマコーミックプレイス間を結ぶ鉄道 (Metra)

RSNA参加者は無料で乗車することができ、列車の一部はクリスマス仕様となっていた。